文春文庫

京都鞍馬殺人事件

山村美紗

文藝春秋

文春文庫

京都鞍馬殺人事件

定価はカバーに
表示してあります

1988年9月10日　第1刷

著　者　山村美紗
発行者　豊田健次
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102
TEL　03・265・1211
落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。
印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-724609-0

京都鞍馬殺人事件

山村美紗

第一章　自動販売機の謎　7
第二章　家元の死　31
第三章　幻の遺書　57
第四章　不倫の恋　83
第五章　死の舞踊会　108
第六章　捜査本部　132
第七章　結婚式　150
第八章　投票　173
第九章　密室の謎三つ　196
第十章　電話トリックの謎　219
解説　権田萬治　229

试读结束：需要全本请在线购买： www.er

京都鞍馬殺人事件

第一章　自動販売機の謎

1

キャサリンは、新しく越して来た京都・伏見のマンションの窓をあけて外を見た。
彼女は、米国の雑誌「シーズ」の特派員として日本に来て、ホテル住いをしていたのだが、今回、マンションに移ったのである。
外は、春だった。
桜の花が咲き、新芽の匂いを含んだ風が吹いてくる。
キャサリンは、大きく深呼吸した。
早朝なので、まだ人影はない。
〈今日は、イチローと映画に行く約束だったわ〉
キャサリンが、にっこりして、窓をしめようとしたとき、一台の自動車が、公園のはじの自

動販売機の前にとまるのが見えた。
中から、細面の品のいい男がおりて来て、自動販売機に、小銭を入れては、缶ジュースを出している。
〈そういえば、喉がかわいたわ、私も、ジュースを買いに行こう〉
キャサリンはそう思って、立ち上ったが、その男が、販売機の前を動かず、何回も何回もジュースを出している様子なので、終るまで待つことにした。
しかし、男は、いつまでも出し続けている。しびれを切らしたキャサリンは、サンダルをはいて、玄関から出た。
公園を突っ切って、そばまで行くと、男がぎくっとしたようにこちらを振り返り、あわてその場をゆずり、車に乗って行ってしまった。
〈どうしたのかしら?〉
キャサリンは車を見送った。
小銭を出して、販売機に入れようとして、ふと、横の空缶入れを見て驚いた。
そこには、中身の入ったジュース缶が、十個あまりも入っているではないか。
〈あの男の人が出しては捨てたのだわ〉
キャサリンは直感した。まだ缶が冷たくひえていたからである。

缶は、二種類あったが、いずれも、八十円のジュースばかりだった。
キャサリンは、はっとした。
〈ニセ硬貨で、釣銭をとろうとしたのじゃないかしら？〉
しかし、あの風采のいい紳士が、釣銭目当てのニセ硬貨を使うとは考えられなかった。
キャサリンは、横にある公衆電話で、浜口一郎のダイヤルをまわした。
「イチロー、おきてる？」
興味のある出来事にぶつかると、すぐに、彼に話すのが、キャサリンのくせだった。
「え？　なんですか？　今、何時ですか？」
イチローのねむそうな声がした。
「早くきて！　変なことがあるの。現場を見たのよ、犯罪の」
キャサリンのけたたましい声に、浜口は、いやおうなしに目がさめたらしい。段々声がはっきりして来た。
「犯罪って、本当ですか？　一体何がおこったんですか？」
「とにかく、私のマンションまで来て！」
「わかりましたよ、やれやれ」
「え？」

试读结束：需要全本请在线购买： www.er

「いえ、いきます」
キャサリンは受話器をおくと、もう一度ジュースの缶を眺め、考え込んだ。
浜口のマンションは近いので、十五分もすると彼がやって来た。
キャサリンは、缶を指さしながら説明をした。
「なるほど、おかしいですね」
浜口は、缶の山を眺めたが、キャサリンがニセ硬貨で、小銭かせぎをしているのではないかというと、首をかしげた。
「一個で二十円しかもうからないのだったら、十個で二百円じゃありませんか。二百円もうけるために、それだけ手間をかけるでしょうか？　それ位だったら、缶ジュースの方も持って行くんじゃありませんか？」
浜口は、まだねむいのか、髪をかき上げながらいった。
「そうね。そのつもりだったけど、私が行ったので、あわてて逃げて行ったんじゃないかしら？」
「そうかもしれませんね。でも、ニセ硬貨を作るのも大変ですよ。重さとか、大きさがよほど合わないと簡単にはジュースは出て来ないと思うんですけどね」
いっているところへ、三十すぎのすらっとした男が、角を曲ってやって来た。

2

男は、自動販売機の前へ来ると、小銭を出して、
「もう、おすみですか？」
と断ってから、硬貨を入れた。そして、押そうとすると、ジュースのところに、売切れの印が出ている。
「あ、ここも駄目か、一体、今朝はどうしたんだろう」
男が呟いた。それから、空缶入れの箱を見て、おや、という顔をしてから、
「おかしいな。これどうしたんですか？」
と、キャサリンたちにきいた。
「今、男の人が出して、捨てていったんだそうです。それでおかしいと話していたところです」
浜口が、キャサリンにきいた通り説明した。
「へんですね。僕は毎朝、ジョギングの途中ジュースを買うんですが、いつも、今頃、売切れなんてことはないんです。それに、角を曲ったところの自動販売機も売切れで、これと同じ中身の入った缶が、三つほど落ちていたんですよ」

その男は、気味悪そうな顔をした。
「やっぱり、何かあるのよねっ！」
キャサリンが、浜口の顔を見た。
「さあ。キャシイが外人だから、びっくりして忘れて行ったんじゃないかな」
京南大学の助教授で、温厚な浜口が、困ったような目を男にむけた。
整った顔の都会的な風貌の男である。
「でも、むこうの自動販売機のところにも、三個ありましたからね、忘れたとは思えないけど」
男は、浜口に遠慮しながら、キャサリンに、小声でいった。
「毒入りジュースじゃない？　近頃よくあるでしょう？　毒入りチョコレートが。チョコから、ジュースになったんじゃあ……。チョコレートも作っているメーカーだわ、このジュース」
キャサリンが、こわごわジュースの缶をとりあげた。
「でも、缶ジュースに毒は入れられないでしょう？　どうやって入れるんですか？」
男がいった。
「ふたをほんの少し引きあけて、そのすき間に注射針で、毒を注ぎ入れて、ふたをもとに戻すというやり方が前にあったけど……これは、そういうことをした形跡もないわ」

キャサリンは、缶を調べてがっかりしたようにいった。
「缶に、直接注射針を刺して、毒を入れたということも……ないですね、それだと、どこかに注射針のあとがあるし、ジュースが洩れてるはずだから」
浜口も、ジュース缶を一つとって眺めながらいった。
「やっぱり、ニセ金を使ったんだわ。この中を調べてみたら、きっと、中に、ニセ硬貨が入っているわ」
キャサリンが、そういって自動販売機を軽く叩いた。
そのとき、がらがらと音がして、自動販売機のうしろの店のシャッターがあがった。キャサリンは、店が開店するのを待って、店の人に話しかけた。
「今、ニセ金を入れて、ジュースをとった人がいるんです。中を改めてくれません？」
「えっ、本当ですか？」
四十歳くらいの店のおばさんは驚き、早速、カギを出して、販売機のうしろに廻ると、
「最近、変造の五百円玉が多いといいますから、それかも知れませんね」
と、いいながらあけてくれた。
「これだけですけど」
彼女は、硬貨の入った箱を渡してくれた。

中を調べていたキャサリンが、
「あったわ！」
と、大声をあげ、一枚の硬貨を掌にのせた。それは、十円玉と同じ位の大きさだが、色が銀色で、メダルのようなものだった。
「桜の図案がまわりにあって、中央に3と数字が入ってますよ」
浜口が、横からのぞき込んでいった。
「一体、何かしら？　記念メダルみたいだけど」
キャサリンは、考え込んでいる。
「それは一枚だけですか？　おかしいな。その人は、少くとも、ここで十缶以上出して、つり銭を出したのでしょう？　一枚しかないというと、その人が入れたものかどうかわからないですね」
傍の男が首をかしげた。
「本当だわ。私はきっとこの中に、こういうものが十数枚入っていると思ったんだけど」
あとの硬貨を調べてみたが、みんな本物だった。
キャサリンは、店の人にいって、自動販売機に入っている缶の残りと、売上げの金が合っているかどうか調べて欲しいといった。

「ほら、こういうことも考えられるでしょう？　このメダルに、糸をはりつけておいて、中に入れて、品物が出て来たら、引きあげて、また使うという手口が……」

「なるほどね。でも、それだったら、こんなメダルを使わないで、本当の十円玉とか、百円玉に糸をつけると思いますが……」

浜口が反論した。

「とにかく、調べてみて」

キャサリンにいわれて、店の女性は、金と缶を照合した。

「合っていますよ。そのメダルも入れると、きっちりです」

店の人は、そういうと、自動販売機をもと通りに閉めてしまった。

三人は、角を曲ったもう一軒へ行って、同じことを調べて貰ったが、そこは、変造硬貨も、メダルもなく、計算も合っていた。

念のため、放置された中身の入ったジュース缶に、毒が入ってないか調べて貰おうとキャサリンがいい、橋口警部補の家へ電話をかけた。

橋口とは、キャサリンが日本へ来て解決した数々の事件を通じて知り合い、友人になってい

试读结束：需要全本请在线购买： www.er